

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32630

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K21929

研究課題名（和文）ブルーメンベルク神話・宗教論における文化哲学的受容概念の研究

研究課題名（英文）A Study of the Cultural Philosophical Concept of Reception in Blumenberg's Theory of Myth and Religio

研究代表者

下田 和宣 (Shimoda, Kazunobu)

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号：10850844

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 600,000円

研究成果の概要（和文）：20世紀ドイツの思想家ハンス・ブルーメンベルクの神話論や宗教論に見られる「受容」理解に着目し、ブルーメンベルクの思考を「受容の文化哲学」として捉えたうえで、その哲学的な意義と射程を解明した研究。文化に関する起源についての哲学的・人間学的研究が、あるいはその受容・変容に対する歴史学的探究が、といった二分法を超えたところで展開されるブルーメンベルクの文化哲学的思考は、神話や宗教について、あるいは人間について理解するうえで新しい示唆を与えてくれるものである、ということをも本研究は明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

まず、ブルーメンベルクの「受容」理解を、多様なテーマを扱い難解で知られるその諸著作を読み解くための、ひとつの視座として提供したことが、本研究の学術的な意義として挙げられる。起源と受容、オリジナルと変容は宗教や文化を考えるための基礎的なカテゴリーであると言える。従来の理解とは異なり、受容や変容を中心化させるブルーメンベルクの思考は、文化や宗教について柔軟にアプローチするための手がかりとなるはずであることを本研究を提示した。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the understanding of "reception" found in the mythological and religious theory of 20th century German thinker Hans Blumenberg, this study clarifies the philosophical significance and scope of Blumenberg's thinking as a "cultural philosophy of reception". Blumenberg's philosophy of culture, which transcends the dichotomy between philosophical research on the origin of culture and historical inquiry into its reception and transformation, offers new suggestions for understanding mythology, religion, and humanity. This study reveals that Blumenberg's cultural-philosophical thinking provides new insights into our understanding of myth, religion, and humanity.

研究分野：ドイツ文化哲学、宗教哲学

キーワード：ブルーメンベルク 受容 文化哲学 宗教哲学 メタファー

1. 研究開始当初の背景

2020年にブルーメンベルク生誕100周年を迎え、遺稿研究を中心に、国内外で研究の機運が高まっていた。ブルーメンベルクはその浩瀚な著作群により生前には主に人文主義的思想史家として知られていた。それに対して、『人間の記述』(2006年)を中心とする遺稿が明らかにしたのは、ブルーメンベルクの膨大かつ難解な著述の背景にある、人間学的な根本洞察であった。

いわゆるその「現象学的人間学」こそブルーメンベルクの思考の核心であるという理解が定着しつつあるなかで、では、公刊著作で記述された膨大な思想史との関連はどうなるのか、ということが課題となった。すなわち「隠喩学」と呼ばれるそのプロジェクトがテーマとするのは、生物学的・動物学的な人間の条件には還元されない文化的次元の広がりであり、哲学や科学の言語使用にまでその背景をなす隠喩の潜勢力であった。それらの記述をどのようにして人間学的洞察として理解できるか、ということが研究上の課題であったわけである。

その一方で、ブルーメンベルクはジンメルやカッシーラーといった哲学者たちに連なるいわゆる現代ドイツの「文化哲学」の潮流において位置づけられることもある。そこから着想を得て、本研究ではブルーメンベルクの思考の文化哲学的な側面を主題化するに至った。

2. 研究の目的

ブルーメンベルクを文化哲学という観点から解釈するという作業は、単に哲学史的な類似点の整理を目的としたものではない。本研究の目的はむしろ、ブルーメンベルクの思考において独自に実現した文化哲学的問題の深化を取り出すことにあった。カッシーラーを中心としたドイツ文化哲学の古典期において、いまやその非合理的側面を含めた人間の全体像が問題となる。とりわけ伝統的に周縁化されていた神話や宗教の問題が、そこでは思考の中心にある本質的な事柄として理解される。とりわけポイントとなるが「受容」という事柄に対する哲学的な理解である。起源ではなく受容が文化にとって本質的な事柄であるという把握は、すでにカッシーラーによるジンメル批判のポイントでもあった。しかしそれを神話・宗教論の中心へともたらし、大規模な議論を展開したのは、あまり注目されていないが、ブルーメンベルクの功績であると言える。それゆえこの点に着目してブルーメンベルクの神話・宗教論を再構成することは、その文化哲学の意義を把握するうえで最大の課題となる。

3. 研究の方法

ブルーメンベルクの受容概念は、『神話への取り組み』(1979年)と『マタイ受難曲』(1988)といった比較的後期の神話・宗教論において重要な位置を占めている。したがってまずはこれらの著作における「受容」理解を明らかにする必要がある。前者は古代ギリシアのプロメテウス神話が後世のさまざまな言説において受容されてきたかをめぐり、そこからそれぞれの思考を導く背景を浮き彫りにするものであり、後者の宗教論はバッハ「マタイ受難曲」を中心に、宗教的なものの受容の諸相を記述する。それらの論述に見られる「受容」理解を軸とするならば、そこでのブルーメンベルクの思考をいわば「受容の文化哲学」ないし「受容の宗教哲学」として定式化することができる。

ただし、それらの著作において「受容」概念は主題的に論じられることなく、むしろ議論の前提として機能している。そのため、それらの著作における「受容」概念の位置と議論上の役割を正確に理解するためには、その形成史を再構成する必要がある。ブルーメンベルクは最初期の著作においてすでにこの問題に着手していた。そのような見通しのもとで、とりわけ中世末期のスコラ学をテーマとした博士論文(1947年)および書評「時代の境目と受容」(1958年)を研究の対象とした。

このように、本研究はブルーメンベルクの「受容」概念が中心化する後期著作の分析と、最初期からの形成史的検討を行った。

4. 研究成果

2020年度は、『マタイ受難曲』(1988年)を主な分析の対象として、研究を進めた。新約聖書の福音書における受難物語と、バッハの楽曲を中心とするその超領域的な受容をめぐる同書は、ブルーメンベルクの他の著作との関係づけが困難なものであるとされてきたが、本研究は独自にその核心的考察を「宗教受容の哲学」として整理し、それによって著作の構想全体をとりわけブルーメンベルクの初期以来の学問プロジェクトである「隠喩学」と積極的に結びつけることを試みた。「隠喩学」で問題となっているものもまた、隠喩そのものの役割や位置づけに対する哲学的解明ではなく、明晰判明であるべきはずの哲学的諸言説に不意に出現する隠喩の機能であり、自律性をもって展開するその歴史的変遷なのである。つまり隠喩の内実もまた受容という行

為において機能を持つ。初期と後期の仕事をこのように関連づけることにより、本研究はブルーメンベルクの諸著作全体に一貫している問題意識を導き出した。すなわちそれは、伝統的な形而上学が問題としてきた「起源」への探求を断念し、そこから転じてむしろ受容過程として現実化する「変容」へと考察を向かわせる、という課題である。さらに本研究が明らかにしたのは、視点の転換を促すブルーメンベルクの思索が、哲学的ないし宗教的な根源性の放棄を意味するのではなく、むしろむしろ変容と受容の過程において生成し可能化するような根源性のあり方を追求するものであった、ということである。これらの研究結果は、「ブルーメンベルクにおける宗教受容の哲学」として論文化し、日本宗教学会編『宗教研究』(399号、2020年、1~23頁)に掲載された。

2021年度は『近代の正統性』を中心に他の諸著作を視野に入れることで、理解をさらに掘り下げることを目指した。受容の問題はブルーメンベルクの基礎的な歴史理解に関わるものである。中世から近代への時代転換を促しているのは、「かつては答えが可能であると見なされていた問い」に対する解答の信憑性や通用性が失われた事態であり、そこでかつての自明性に穴が開くという事態に直面した人間特有のリアクションである。それをブルーメンベルクは「再充填」と呼ぶ。歴史における意味の空白化と補填への切迫に対し、純粹に合理的な処置が行われることは不可能であり、それは常に急場凌ぎの埋め合わせに留まる。このように、何かを新たに受容するという行為もまた「歴史的な真空恐怖」に対する人間的「自己防衛」によって促される「再充填」として理解される。ブルーメンベルクのこうした「受容」理解は、Leben(生)ではなくNachleben(死後生)に文化の本質を見るヴァールブルクおよびカッシーラー的文化哲学の潮流に属しつつ独自性を持つ。これらの考察は宗教哲学会第十四回学術大会におけるシンポジウム「宗教概念批判以降の宗教と哲学」の提題「概念を駆り立てるもの 宗教概念批判とドイツ概念史研究」として公表された。

2022年度では、初期における受容理解の形成、60年代に成立する「隠喩学」プロジェクトとその接続を主題化した。ブルーメンベルクはその博士論文「中世スコラ的存在論の根源性の問題」(1947年)において、古代から中世への移行におけるキリスト教受容、および盛期スコラ学におけるギリシア哲学受容を問題とする。ブルーメンベルクによれば、これらの受容の過程には、起源に還元されることのない特有の「根源性」が認められる。受容を導き促すのは意味の空白化を埋め合わせようとする人間的な要求である、という後年の著作に見られる基本的洞察の萌芽がすでに博士論文に見出されることを明らかにした。とりわけ『隠喩学のパラダイム』(1960年)をはじめとする「隠喩学」の構想において、受容を促進させる背景というテーマは中心的なものである。この点に関して難解な著作のもととなる1958年の講演記録を調査することで、明確化することができた。このようにブルーメンベルク哲学の中心に受容の問題を見出し、その核心を取り出すとともに、それが現代宗教学の議論に対してもたらしうる寄与についても考察した。西洋近代的な宗教概念に対する近年の根底的な見直し(いわゆる「宗教概念批判」)において、文化と宗教を厳格に分割する従来の理解に対する反省が求められている。ブルーメンベルク受容論が示唆するのはまさに、文化と宗教との関係をより内的で柔軟なものとして理解するための視座なのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 下田和宣	4. 巻 40
2. 論文標題 宗教と文化の哲学のために 「宗教」概念批判と二十世紀ドイツ概念史研究の交点から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 宗教哲学研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下田和宣	4. 巻 42
2. 論文標題 哲学的言語の克服されざる根本要素としてのメタファー ブルーメンベルク「メタファー学のテーゼ」講演について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ヨーロッパ文化研究	6. 最初と最後の頁 73-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下田和宣	4. 巻 606
2. 論文標題 背景化する隠喩と隠喩使用の背景 ブルーメンベルクをめぐるひとつの哲学的問題系	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 哲学研究	6. 最初と最後の頁 25-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下田和宣	4. 巻 399
2. 論文標題 ブルーメンベルクにおける宗教受容の哲学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 下田和宣
2. 発表標題 受容の根源性について：ブルーメンベルク「隠喩学」へのひとつの序奏
3. 学会等名 宗教哲学会第十五回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 下田和宣
2. 発表標題 概念を駆り立てるもの 宗教概念批判とドイツ概念史研究（シンポジウム：宗教概念批判以降の宗教と哲学）
3. 学会等名 宗教哲学会第十四回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 下田和宣
2. 発表標題 ブルーメンベルクにおける「非概念性の理論」と「隠喩学」
3. 学会等名 日本哲学会第79回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 下田和宣
2. 発表標題 神を死者として思い出すこと ブルーメンベルクの「哲学者の神の過剰」について
3. 学会等名 宗教哲学会第12回学術大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------